

『正法眼藏抄』の用語

「尽十方界真実人体」の使用法の特徴について

石 島 尚 雄

一 序

私は、かねてから、『正法眼藏抄』の中の天台用語をはじめとした様々な用語について調べて来た。その中で、「尽十方界真実人体」という用語が大変多く使用されていることに気が付いた。そこで今回は、その用語がどの様な場面で使われているのかということを調べてみたい。

ところで、考察に入る前に、「尽十方界真実人体」の起源とその意味について述べたい。その先駆となる表現は、『伝灯錄』卷第十によると、長沙景岑の「尽十方世界是沙門全身」（大正五一卷二七四上）であることが知られる。また『伝灯錄』卷第二十一の慧球寂照禪師伝には、「只如^ミ先師道^ミ尽十方世界是真実人体。」（大正五一卷三七二下）とあり、慧球寂照の師は、玄沙師備であるところから、直接の起源は、玄沙師備になると思われる。そしてその意味は、「世界（宇宙と同じ

意味を込めて）のすべてが、ほんとうの人体である」ということになる。つまり、全世界と自己とが、一体不可分であることを、この様に述べたのであろうと思われる。またこれは天台教学で、「諸法実相」という表現で、仏法を言い表わそうとする姿勢によく似たものであると思われる。

さて、調べる方法であるが、『正法眼藏』の本文と、その部分を注釈した『正法眼藏抄』の文とを検討することを通じて、その使用法の特徴を明らかにしていきたいと思う。そして、なぜその場面で「尽十方界真実人体」という用語を使つて注釈したのであるかを考えてみたいと思う。

二 用語が使われている巻について

『正法眼藏抄』の中で、明きらかに「尽十方界真実人体」という用語を使用して注釈している巻名を次に列挙すると、『現成公按』第一、『仏性』第三、『身心学道』第四、『行仏

威儀』第六、『古仏心』第九、『大悟』第十、『坐禪箴』第十

二、『海印三昧』第十三、『空華』第十四、『光明』第十五、

『行持』第十六、『授記』第二十一、『都機』第二十三、『溪

声山色』第二十五、『仏向上』第二十六、『夢中説夢』第二十

七、『山水経』第二十九、『看經』第三十、『諸惡莫作』第三

十一、『神通』第三十五、『葛藤』第三十八、『柏樹子』第四

十、『三界唯心』第四十一、『十方』第五十五、『遍參』第五

十七、『家常』第五十九、『三十七品菩提分法』第六十、『西

来意』第六十二、『發菩提心』第六十三、『三昧王三昧』第六

十六、『自証三昧』第六十九の三十一巻になり、七十五巻の

『正法眼藏抄』の中に於いて、全編を通じて、平均して使われているのが分かる。また、単に「尽十方界」だけ、或いは「真実人体」だけ述べているものまでを含めるならば、七十五巻を通じて見出すことができる。

そこで次に、この中から「尽十方界真実人体」という用語を使用するに際して際立った特徴を有する部分を紹介して考察しよう。

三 詮慧が注釈する場合について

『眼藏』の『仏性』の巻に、

尊者の嫡嗣、迦那提婆尊者、あきらかに満月相を「識此」し、円月相を識此し、身現を識此し、諸仏性を識此し、諸仏体を識此せ

り。（日本思想大系『道元』上五八）

という文があるが、詮慧は、こここの部分に、

一切衆生悉有仏性ト心得、コノ衆生ノ身体、皆仏性ナラムニハ、能見所見、能聞所聞、能識所識、能住所住アルヘカラス、仏性ト親切ナレハ、不見不聞不識不住也、目耳心身ヲカム時ハ、目ハ尽十方界沙門一隻眼ノ目ナルヘシ、心ハ三界唯心ナルヘシ、身ハ尽十方界真実人体ナルヘシ、耳モ是程ニ心得ヘシ、頂頸眼睛鼻孔舌頭語頭トモ可ニ心得、（『曹洞宗全書』注解一、七四下～七五上）

と注釈している。ここは、「諸仏性を識此し」という文の「諸仏性」について注釈したものと思われる。ここで、私が注目した点は、『眼藏』の本文では、満月相、円月相、身現、諸仏性、諸仏体を識此したと述べているだけなのに、仏性の説明をする時に、「目ハ尽十方界沙門一隻眼ノ目ナルヘシ、……、身ハ尽十方界真実人体ナルヘシ、」ということまで述べている点である。というのは、道元禅師が直接、「尽十方界真実人体」と言つていないので、詮慧は、「尽十方界真実人体」という用語を使って注釈しているからである。更に言うならば、道元禅師が、仏性のことと言うと、詮慧は、「尽十方界真実人体」という用語でもって、「仏性」を、捕え直してがここに読みとれると思う。したがつて、詮慧は、「尽十方界真実人体」という用語でもって、「仏性」を、捕え直しているといえよう。

次に『大悟』の巻を見ると、

いはく、無師知者あり、善知識によらず、經卷によらず、性によらず、相によらず、自を撥転せず、他を回互せざれども、露堂堂なり。（『道元』上一、一八）

という文があるが、詮慧は、この部分に、

無師知者トハ、前修行久学ノ者、今ノ龍女如キカ、無師知者ハ、又イハハ、尽十方界真実人体ナルヘキ歟、（『曹全』注解一、二三、四上）

と注釈している。

ところで、道元禪師は、人根には、生知、学而知、仏知者、無師知者というように多般があると述べ、更に、

しかあれば、いづれの情無情か生知にあらざらむと参考すべし。

生知あれば生悟あり、生証明あり、生修行あり。しかあれば、仏祖すでに調御丈夫なる。これを生悟と称じきたり。（『道元』上一、一九）

と述べている。つまり、無師知者は生知なのであり、生知は生悟であるのである。したがつて、無師知者は、生悟であることがここに見出されるのである。ここを念頭に置いて、詮慧の注釈を、検討することにしよう。

ここでは、一度、別の形の注釈をしたあとで、「又イハハ、尽十方界真実人体ナルヘキ歟」と述べている点である。とおりいっぺんの注釈に終始するならば、「前修行久学ノ者、今ノ龍女如キカ」だけで十分意味が通じているはずである。

しかし、後で、「尽十方界真実人体」のことを付加していることは、そこに、詮慧の意思が介在していると見なければならぬ。つまり、道元禪師の本文を、「尽十方界真実人体」という用語でもって捕え直そうとしていることが、ここに見てとれると思う。

ところで、道元禪師のこの巻のこの一節は生悟について述べているのであり、特に、「尽十方界真実人体」のことは述べていない。しかし、詮慧になると、「尽十方界真実人体」という目でもう一度捕え直しているといえる。この意味で、詮慧は、生悟を「尽十方界真実人体」で捕え直そうとしていると思える。

次に、『坐禪箴』を見ると、

薬山弘道大師、坐次有僧問、「兀々地思量什麼」。師云、「思量箇不思量底」。僧云、「不思量底如何思量」。師云、「非思量」。大師の道、かくのことくなるを証して、兀坐を参考すべし。兀坐正伝すべし。兀坐の仏道につたわれる参究なり。（『道元』上一、二七）

という文がある。この文に対しても、詮慧は、坐禪ハ人ノ坐禪スルニ非ス、兀坐ニ人ハ被ニ坐禪也、兀坐ノ思ト云ハ端坐ナリ、蒲団也、手足ヲカサネテクム也、一念ニ念ト云、一大地山河ヲフサネテ念ト云ヘキ也、此時尽十方界真実人体トモ云也、又坐断十方トモ云ヘキ也、（『曹全』注解一、二六一下）

と注釈している。

ここでも、道元禪師は、薬山の言葉を用いて、ただ兀坐、

すなわち坐禪のことのみを述べていて、「尽十方界真実人体」のことばは出てこない。しかし、詮慧は、その後、付け加えて、「一念一念ト云、一大地山河ヲサネテ念ト云ヘキ也、此時尽十方界真実人体トモ云也、……」と述べている。この付け加えるという行為は、詮慧の意思と見てよいと思う。ここで、詮慧には、「尽十方界真実人体」をもつて、坐禪を捕え直そうとする意思が介在していると思われる。

次に、『渙声山色』を見ると、

瑠璃の広照大師慧覺和尚は、南嶽の遠孫なり。あるとき、教家の講師子璿と云、「清淨本然、云何忽生山河大地」。かくのごとくとふに、和尚しめすにいはく、「清淨本然、云何忽生山河大地」。ここにしりぬ、清淨本然なる山河大地を、山河大地とあやまるべきにあらず。しかあるを、経師かつてゆめにもきかざれば、山河大地を山河大地としらざるなり。(『道元』上二九三)

という本文に対して、詮慧は、

衆生ノ見ニモ、清淨本然ナリ云何忽生山河大地ト心得、仏見ニモ清淨本然ナルハ、山河大地ト心得、タタ清淨本然ト云詞ト、山河大地ト云詞トヲ、各別ニシテ迷也、依正一如身土無二ナムト談也、ナラヒヌル上ハ、不レ可レ有ニ不審、尽十方界真実人体自己光明眼睛ナムトモ云フ、ハシメテ不レ可レ驚、清淨本然ハ迷悟ナク、隠頭ナク、生滅ナシ、山河大地ハ猶迷也トハ差別スヘカラス、タタココニハ皆清淨本然ナリト、習トキニヲシカヘシテ、又清淨本然也トハ云ナリ、(『曹全』注解一、五四四下)

と注釈している。

ここは、道元禅師に於いては、「山河大地」という、いわば「大自然」を相手にして仏法を述べているのである。そこで、詮慧に於いては、この「大自然」を相手にしたときの教學の立場と、永平門下の立場の違いを、明きらかに示すことを通してより宗乘を明きらかにしようとしたと思われる。

ところで依正一如身土無二については、荆溪湛然に「十不二門」があり、その中に「依正不二門」(大正四六卷七〇〇三下)があるので、教學の中でも天台教學に関連が見られる。

さて、「清淨本然」と「山河大地」を別にすれば迷うが、教學の方でも依正不二と説いているので、そのことを學習していれば、別に驚くべきことではないということを指摘しながら、更に「尽十方界真実人体」もその意味で驚くべきことではないと述べているのであるが、ここでもやはり、詮慧が、依正一如身土無二という教學をベースにする用語のすぐ後に「尽十方界真実人体」という語を付加していることに、詮慧の意思が表われているものと見てさしつかえないと思う。更に、もし天台教學と対比しようという意思が無かつたならば、すぐ後に「尽十方界真実人体」という用語を出そうとも思わないであろう。したがって、この文章からは、道元禅師の「山河大地」と「依正一如身土無二」と「尽十方界真実人体」とが、それぞれ詮慧に於いては関連性があることが分かる。そしてこのことから、「大自然」と「依正不二」と

「尽十方界真実人体」が詮慧に於いて結びついていることを示す資料であるといえる。

次に、『柏樹子』をみると、

いましるべき道理は、「庭前柏樹子」、これ境にあらざる宗旨なり、「祖師西來意」、これ境にあらざる宗旨なり、「柏樹子」、これ自「已」にあらざる宗旨なり。：いま「如何是祖師西來意」と道取せるは、問取のみにあらず、兩人同得見のみにあらざるなり。正当恁麼問時は、一人也未可相見なり、自己也能得機なり。さらに道取するに、渠無不是なり。このゆへに錯々なり、錯々なるがゆへに將錯就錯なり。承虛接響にあらざらんや。豁達靈根無向背なるがゆへに、庭前柏樹子なり。（『道元』上四四八～四四九）

という文がある。詮慧は、これに対して、

豁達靈根無向背ト云フ、コレ承虛接響ニモアタル、將錯就錯ニモアタルヘシ、尽十方界真実人体ノ義也、靈根トハ人ニツク、達シタルトキハ、無向背ト也、コレハ已前ニ和尚ソ吾ソ人ソト云テ、一ナル所ヲソムカヌキナリ、（『曹全』注解二、六二下）

と注釈している。

「庭前柏樹子」は、禅家に於いては、公案の一つに数えられるものである。道元禪師も、「庭前柏樹子」これ境にあらざる宗旨なり」と、「庭前柏樹子」が宗旨を述べたものであることを主張している。更に、「庭前柏樹子」が、「渠無不是」「錯々」「將錯就錯」「承虛接響」「豁達靈根無向背」であることを述べている。

ところで、詮慧を見ると、「豁達靈根無向背ト云フ、コレ承虛接響ニモアタル、將錯就錯ニモアタルヘシ、尽十方界真実人体ノ義也」と、「豁達靈根無向背」が「尽十方界真実人体」であることを述べている。また、道元禪師によれば、「庭前柏樹子」は「豁達靈根無向背」であるのであるから、詮慧の立場になると、「庭前柏樹子」は「尽十方界真実人体」ということになる。これは、詮慧が、「尽十方界真実人体」で、公案「庭前柏樹子」を、捕え直したものであると見ることができるよう。更に言えば、これは、詮慧が「尽十方界真実人体」で、公案を捕え直した一例になると思う。

四 経豪が注釈する場合について

『現成公按』の卷に、

諸法の仏法なる時節、すなわち迷悟あり、修行あり、生あり、死あり、諸仏あり、衆生あり。万法ともにわれにあらざる時節、まどひなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。（道元）上三五

という文があるが、経豪は、これに対して、

迷ト云ハ仏法ノ時節ニ云ハルル也ト可知、迷ト云モ悟ト云モ、日来我等カ、見解ノ如ニアラサル故ニ、ナラヘテ迷悟有ト説ク、悟モ迷ニ対シテ、心得シ時ノ悟ニテハ不可有、仏モ衆生モ、又以テ同、尽十方界真実人体ノ衆生ナリ、仏トトクニ、衆生ノコスヘカラス、悟トトクニ迷ノコルヘカラスト云、是モ一重ノ道理也、但

親切ニ云トキハ、タタニナカラナラヘテ云ニ障碍ナキヲ、仏法ノ時節トハ云ヘキナリ、（『曹全』注解一、四上～下）と注釈している。

経豪に於いては、「迷」も「悟」も「仏」も「衆生」も、日常の我々の見解とは、違うと述べ、「尽十方界真実人体ノ衆生ナリ」と説くにいたつてある。つまり、「仏法の時節」では、「衆生は尽十方界真実人体の衆生である」と述べているのである。しかし、道元禪師の本文では、「尽十方界真実人体」という用語は、使われていない。したがつて、ここでは、経豪が、道元禪師の「仏法の時節」を、「尽十方界真実人体」という用語で捕え直そうとしたと見るべきである。この巻は、「仏法の時節」つまり、「仏法」を、経豪が「尽十方界真実人体」という用語で捕え直している例として、取り上げられるものであると思う。

次に『身心学道』を見ると、

身学道といふは、身にて学道するなり。赤肉団の学道なり。身は学道よりきたり、学道よりきたれるは、ともに身なり。尽十方界是箇真実人体なり、…。この身体をめぐらして、…捨家出家する、真実の学道なり。このゆへに真実人体といふ。…。「尽十方世界」といふは、十方面ともに尽界なり。東西南北四維上下を十方といふ。かの表裏縦横の究尽なる時節を思量すべし。思量するといふは、人体はたとひ自他に罣礙せらるといふとも、尽十方なりと諦観し、決定するなり。人体は四大五蘊なり、大塵…、聖者

（七九）

という文がある。これに、対して、経豪は、
尽十方界真実人体、…ノ様、奥ニ委被レ釈之、…、（『曹全』注解一、一三一上～一三四下）

という様に注釈している。すなわち、経豪はその注釈の中で、道元禪師がみずから釈しておられるので、経豪自身は、これ以上注釈しないことを表明しているのである。そして、専ら、語意の解釈をしていて、「尽十方界真実人体」という用語でもって解釈しなおすということはしていない。以上のことから、経豪は、道元禪師の『身心学道』の巻の「尽十方界真実人体」についての拈提をもとにして、それを経豪自身の解釈の基準としたのではないかと思われるのである。そうであるならば、この『身心学道』の巻は、永平門下に於いて、「尽十方界真実人体」の意味を解明するのに最も大切な卷になる。そこで、道元禪師の説に従つて分析しよう。

「人体」というのは、自他に罣礙せられているが、東西南北四維上下の總てであると、諦観し、決定することである。

それが、尽十方世界の思量である。そして、その「人体」をもつて「捨家出家」するのが真実の学道である。その学道をしているところのいまの汝、いまの我こそが「尽十方界真実人体」の「人」である。このところを間違えずに学道するのである。

以上が、道元禅師と、経豪の「尽十方界真実人体」についての認識であると思う。またこの巻は、道元禅師に於ける「尽十方界真実人体」と「学道」すなわち「修行」との関係を知る上で最も大切な巻であると思う。従つて別の場で更に研究するつもりである。

次に『三界唯心』を見ると、

釈迦大師道、「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」。いまこの三界は、如來の我有なるがゆへに、尽界みな三界なり。三界は尽界なるがゆへに、「今此」は過現當來なり。過現當來の現成は、今此を罣礙せざるなり。今此の現成は、過現當來を罣礙するなり。「我有」は尽十方界真実人体なり。……衆生は尽十方界真実人体なり。一々衆生の生衆なるゆへに衆生なり。「悉是吾子」は、子也全機現の道理なり。(『運元』下一二) という文がある。これに対して、経豪は、

……是ハ皆是我有ノ我有ヲ被レ釈也、我有ハ尽十方界真実人体トアリ、仏ハ覺悟如來、衆生

アリ分明也、衆生又尽十方界真実人体トアリ、

ハ迷妄ノ凡夫也ト云見解ハ、不レ可レ残也、又衆生ト云ハ、アラユル無量無邊ノ數多キ物ヲ取集タル名目トコソ聞ユレ、……、是又悉是吾子ノ經文ヲ被レ釈、此悉是吾子ハ、子也全機現トアリ、不レ可レ疑、(『曹全』注解二、七一下～七二上)

と注釈している。

『法華經』卷第二譬喻品に、

一切衆生、皆是吾子、深著世樂、無有慧心、……、如來已離、三留火宅、寂然閑居、安處林野、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此處、多諸患難、唯我一人、能為救護(大正九卷一四下)

というのがあることから、道元禅師は、『法華經』の經文に對して解釈したことになる。ところで、『法華經』の原文を見るかぎり、「深著世樂、無有慧心」とあることから、「其中衆生」というのは、凡夫であることがわかる。しかし、道元

禅師は、「我有は尽十方界真実人体なり。……。衆生は尽十方界真実体なり。一々衆生の生衆なるゆへに衆生なり。」と述べているのである。これは、道元禅師ご自身の「尽十方界真実人体」による『法華經』の捕え直しの例であるといえる。この例は、詮慧、経豪に先立つ例なのであるから、詮慧、経豪は、道元禅師のこの様な捕え直しの例を手本として、自分達も「尽十方界真実人体」という用語で、様々な場面に於いて捕え直したのではないかと思わせる例である。

ところで、経豪の注釈を見ると、経豪自身は、この場で

は、捕え直す作業はしていない。ただし、「仏ハ覺悟如來、衆生ハ迷妄ノ凡夫也ト云見解ハ、不可^レ残也、又衆生ト云ハ、アラユル無量無辺ノ數多キ物ヲ取集タル名目トコソ聞ユレ、」と述べていることから、『法華經』の原文の立場とは違ひ、道元禪師の立場であることが分かる。

以上のことから、この巻では、道元禪師自身が、「尽十方界真実人体」という用語で、『法華經』を原文の意とは違う意味に捕え直しているので、経豪がそれにならつて、「尽十方界真実人体」という用語で捕え直すのではないかという重要な示唆を与えている点で注目に値することが知られる。

次に『十方』の巻を見ると、

「尽十方界、沙門全身」。一手指^レ天是天、一手指^レ地是地。雖^ニ然如^レ是、天上天下唯我獨尊。これ沙門全身なる十方尽界なり。頂頬・眼睛・鼻孔、皮肉骨髓の箇々、みな透脱尽十方の沙門身なり。尽十方を動著せず、かくのことくなり、擬議量をまたず。尽十方界沙門身を拈來して、見尽十方界沙門身するなり。(『道元』下一四五)

という文がある。この文に対しても、経豪は、

是ハ釈尊御誕生ノ時ノ事也、……、此天上天下を、唯我獨尊ト談ス、是則沙門全身ナル、十方尽界ナルヘシ、……、沙門全身ハ、頂頬眼睛、鼻孔、皮肉骨髓等、一一皆透脱、尽十方ノ沙門身也トアレハ、各各ニ皆透脱スヘキ也、尽十方ヲ動著セストハ、……、

『正法眼藏抄』の用語「尽十方界真実人体」の使用法の特徴について(石島)

眼睛時モ尽十方也、鼻孔乃至皮肉骨髓ノ時モ、尽十方界也、ユヘニ尽十方ヲ動著セスト云也、……、尽十方界ヲ以テ見也トモ、行ストモ、証ストモ云心地也、(『曹全』注解二、二四五上~下)

と注釈している。この『十方』の巻は、主に「尽十方界」の「十方」を中心として述べておられる部分である。そして「尽十方界沙門全身」は、その中の一節である。この巻ではこの他に、「十方仏土中、唯有^レ一乘法」、「唯我知是相、十方仏亦然」、「尽十方界、是沙門^ニ若隻眼」、「尽十方界、是沙門家常語」、「尽十方界、是自己光明」、「尽十方界、無一人不自己」、「尽十方界、是一顆明珠」、「十方薄伽梵、一路涅槃門」について道元禪師は述べられている。ここで特に注意したいことは、以上列記したことは、それぞれ対等の地位を有していて、道元禪師にとつては、同一の内容を述べるという立場であることがある。したがって、『法華經』の「十方仏土中、唯有^レ一乘法」(『法華經』卷第一方便品、大正九、八上)と、「尽十方界沙門全身」が道元禪師にとつて、同一の立場を有していることに注意しなければならぬと思う。

ところで、この巻は、道元禪師自身が、「尽十方界沙門全身」のことをとり扱っているので、経豪自身は、新たに、「尽十方界真実人体」(この場合は「尽十方界沙門全身」)で捕え直す作業はしていない。そして、道元禪師の述べられた用語の範囲内で言いかえをしているだけである。

しかし、その精神をくみとると、道元禅師以上に、「尽十方界沙門全身」という用語の中に、釈尊の「天上天下唯我独尊」の意味をくみとっているように思えるのである。という

のは、「此天上天下ヲ、唯我独尊ト談ス、是則沙門全身ナル、十方尽界ナルヘシ」と注釈しているからである。

したがつて、「尽十方界真実人体」の先駆的表現である「尽十方界沙門全身」が道元禅師の拈提を通して釈尊と関連付けられていることがここに知られ、同時に、『法華經』の「十方仏土中唯有一乘法」とも関連付けられていることがここに知られると思う。

次に『三十七品菩提分法』を見ると、

「観身不淨」といふは、いまの観身の一袋皮は尽十方界なり。これ真実体なるがゆへに、活路に跳々する観身不淨なり。……。観身は身觀なり、身觀にて余物觀にあらず。正当觀は卓卓來なり、身觀の現成するとき、心觀すべて模未著なり、不現成なり。しかるゆへに金剛定なり、首楞嚴定なり。ともに観身不淨なり。（『道元』下一七九—一八〇）

という文がある。これに対して経豪は、

観ト云事、意地ニ約シテ談事也、閑ニ心ヲシツメテ、身ノ不淨ヲモ観シテ、愛執ヲモハナルナムト心得ル、是常事也、今ノ観非爾、観身ト云へ、旧見ニ猶迷ヌヘシ、身觀トイフハ今ノ所談ニ相叶也、其故ハ此身ハ尽十方界真実人体也、是ヲ観ト談スル時ニ、身觀ト云へ、ヒント道理ニ相叶也、身觀ニテ余物觀ニアラ

スト云、観ノ外ニ余物不レ交ル道理ナリ、……（『曹全』注解二、三三五上—下）

と注釈している。

この巻は、道元禅師の表現に於いては、「いまの一袋皮は尽十方界なり。これ真実体なるがゆえに、活路に跳々する観身不淨なり。」という表現であつて、その意味をくみとれば「尽十方界真実人体」で「観身不淨」が捕え直されていると見られなくもないが、経豪になると、「観身ト云ヘ、旧見ニ猶迷ヌヘシ、身觀トイフハ今ノ所談ニ相叶也、其故ハ此身ハ尽十方界真実人体也」と、はつきり「尽十方界真実人体」という用語で捕え直していることが分かる。

更にもう一つ問題点が見出せる。それは、「観ト云事、意地ニ約シテ談事也」と述べている点である。もともと天台三大部の一つ『摩訶止觀』卷第二上では、「方法者。身論ニ開遮。口論ニ説默。意論ニ止觀」（大正四六卷一「中」と述べていることから、経豪のこの様な表現は、明らかに天台止觀を意識したものと云える。しかも、つづけて、「閑ニ心ヲシツメテ、身ノ不淨ヲモ観シテ、愛執ヲモハナルナムト心得ル、是常事也、今ノ観非爾」を述べていて、いわゆる天台止觀をはじめとする普通にいわれているところの「観」を否定している。そして、その否定の様子をみると、「観身」ではなくて、「身觀」であると述べ、その理由は、「此身ハ尽

「十方界真実人体也」と述べているのである。

これは、道元禅師の立場では、まだ明確にされていないものの、経豪の立場では、「尽十方界真実人体」という立場で、天台止観をはじめとする一般仏教の「観」の立場を否定したことになると思う。結局、経豪が、「尽十方界真実人体」という用語を使用して、天台止観をはじめとした「観」の立場を否定していることから、経豪が、教学の立場をも意識した上で、「尽十方界真実人体」という用語を、使用していたことが、『三十七品菩提分法』の巻から知られると思う。

五 結 論

『正法眼藏抄』の中では、「尽十方界真実人体」という用語が大変多く使用されている。そして、全七十五巻のうち三十一巻は明きらかに使用されており、「尽十方界」とか「真実人体」という表現も含めれば全編を通じて見出せる。またその用語の意味は、「世界のすべてが、ほんとうの人体である」ということになり、道元禅師では、「人体はたとひ自他に罣礙せらるといふも、尽十方なりと諦観し、決定するなり。」（『身心学道』）ということになる。そして、その使われ方の特徴は、詮慧では、『仮性』、『大悟』、『坐禪箴』、『渙声山色』、『枯樹子』の巻に良く表わされ、経豪では、『現成公按』、『身心学道』、『三界唯心』、『十方』、『三十七品菩提分

法』の巻に良く表わされている。その中で、『身心学道』、『三界唯心』、『十方』以外の巻は、各々、詮慧、経豪が、道元禅師の拈提を、「尽十方界真実人体」という用語を使用して、捕え直している。その捕え直された本の内容を見てみると、「仮性」、「生悟」、「坐禪」、「山河大地」、公案「庭前柏樹子」、「仮法の時節」、「観」などが上げられる。これらは、「仮法」に於いて大変重要なものばかりである。また、これらを抜きにしては、「仮法」は語れないと言える。つまり、「仮法」に於ける重要な内容を、「尽十方界真実人体」で捕え直そうとする意思が読みとれるのである。他方、『身心学道』、『三界唯心』、『十方』では、すでに道元禅師自身が、その「捕え直し」をしているといえる。したがつて、経豪は、新たに捕え直すことはせずに、『眼藏』の用語の範囲内で注釈するのにとどまっているのである。このことは、（詮慧、経豪が、「道元禅師の捕え直しの例」を手本として、自分達も「尽十方界真実人体」という用語で捕え直した）ということを暗示させる。

以上、考察してきたが、次の二点についてまだはつきりしていない。そこで、

- 一、『尽十方界真実人体』の中国に於ける思想史の考察。
- 二、道元禅師と「尽十方界真実人体」の関係の考察。

を今後に期してこの小考を終りたいと思う。